明治４(1871)年に乾板法が発明され、改良されていくと、写真撮影はかなり簡便なものとなりました。乾板は工場等で生産されたものが用いられ、露光時間も断然短くなり、まとめて現像できるので、湿板時代に比べ、一度にたくさんの写真を撮ることが可能となりました。

日本では、明治40(1907)年前後に乾板法が普及したことで、写真館が一気に増えていきました。本県も例外でなく、繁華街に写真館がたくさんでき、競争も激しくなったようです。

ガラス湿板写真《幹家へ３》

鶏卵紙にプリントされた写真《幹家へ 20》

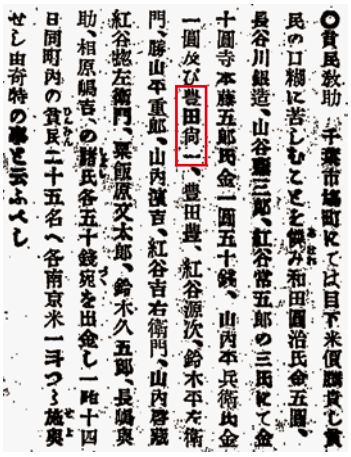
ガラス乾板写真《板垣家ア５》

湿板法も乾板法も薬液を塗布した板ガラスに撮影し、ネガ画像ができる点は同じです。ただし、ガラス湿板は、黒紙等の上に置くと、そのままでポジ画像が得られるので、下地を黒く塗った桐箱に収められました。もちろんプリントすることもでき、卵白を使った印画紙(鶏卵紙)が用いられました。鶏卵紙へのプリントは時間がたつと黄ばんで画像が薄くなることが特徴です。一方、ガラス乾板は、撮影・現像するとネガ画像ができるので、印画紙へプリントしなければポジ画像は得られません。撮影自体はだいぶ簡便になりましたが、必ずプリントする必要が生じ、この点では手間が増えました。

2　県内の写真師・写真館とその写真

千葉県で最初の写真館は、明治７(1874)年に豊田尚一(弘化元(1844)年～明治32(1899)年)が県庁近く(千葉市中央区市場町)に開業したのが最初になります。一般の人がカメラを持つことが稀であったこの時代、富裕層を中心に写真館の需要は高く、大いに繁盛したようです。

豊田尚一は、写真館近くの千葉教会の教会堂建設に大きな役割を果たし、貧民救済等の社会貢献活動や自由民権運動の集会に参加するなど、知識人として積極的に社会活動にかかわっていました。


○貧民救助　千葉市場町にては目下米價騰貴し貧民の困窮に若しむことを憐み和田園治氏金五圓、長谷川銀造、山谷惣三郎、紅谷常五郎の三氏にて金十圓寺本藤五郎氏金一圓五十錢、山内平兵衛氏金一圓及び豊田尚一、豊田豊、紅谷源次、鈴木平左衛門、勝山平重郎、山内儀吉、紅谷吉右衛門、山内磨藏、紅谷惣左衛門、栗飯原文太郎、鈴木久五郎、長嶋與助、相原嶋吉、の諸氏各五十錢宛を出金し一昨十四日同町内の貧民二十五名へ各南京米一斗づゝ施與せし由奇特の事と云ふべし

左：豊田尚一肖像《豊田家オ6》
中：日本基督教団千葉教会教会堂　※平成28(2016)年撮影

豊田尚一は、主任として建設に尽力し、明治28(1895)年10月に完成しました。
※千葉県指定有形文化財（昭和50(1975)年12月12日指定）

左：東海新報　明治28年８月16日《県史収集資料》

米価高騰で困窮した人々への救済活動に豊田尚一が寄付をしたことが記されています。